

第七章 振り出し

平成四年一月から平成四年九月までのできごと

新チーム構成メンバー

三年生	二年生	一年生
マネ 生島(淵中)	マネ 富永(三川中)	マネ 稲次(淵中)
マネ 西村(戸町中)	選手 鴨川(中里中)	マネ 渡辺(長与中)
選手 一瀬(長与中)	選手 神崎(有喜中)	マネ 森 (片淵中)
選手 山口(深堀中)	選手 安部(横尾中)	選手 工藤(伊奈東中)
選手 山川(山里中)	選手 野口(土井首中)	選手 寺平(長崎中)
選手 川迫(東部中)	選手 吉村(苓北中)	選手 村田(横尾中)
	選手 三浦(西浦上中)	選手 二井(長与中)
	選手 平田(長与中)	選手 宇佐美(千種台中)
	選手 吉永(西浦上中)	選手 富永(滑石中)
	選手 下村(式見中)	
	選手 宮田(小江原中)	

新チーム

話は少しさかのぼる。

国体の惨敗の後、暮の選抜大会に向けてどのようにしてチームを建て直そうかと思索する一方、次年度の新チームの事も考えなければならなかった。新チームの最初の公式試合は一〇月の下旬に行なわれる長崎地区新人戦である。

新チームのスターティングメンバーで頼りになるのは、インターハイ優勝チームの中で唯一のスターティングメンバーである一瀬(一六六センチ ガード)だけだ。あとは、二年生では山口(一六七センチ フォワード)、一年生では鴨川(一五八センチ ガード)がなんとかプレイができるかなあという程度。残るふたりの一年生である安部(一六一センチ フォワード)と神崎(一六七センチ センター)は、ボールを持つ度にハラハラするような未熟さであった。

私は地区新人戦に臨むにあたり心穏やかではなかった。それは、浜口・松山の長身選手を中心にしたチームから一転して最高身長が一六七センチの超小型チームになったことに加えて、一瀬以外の選手の貧弱さに何の見通しも持てなかったからであった。

今、鶴鳴のチームはインターハイ優勝という看板で注目の的になっている。それなのに、新チームになって初の公式戦でぶざまな試合をすれば、「鶴鳴は今年だけよ。来年はもうダメ」というような噂が広がる。それが怖かった。そして、私の不安は初戦の野母崎高校戦で見事に的中した。試合は大差で勝つたものの試合内容はしどろもどろ。バスケットボールに詳しくない人が見てもまるでバスケットになっていないということがすぐにわかるような試合だった。

私は、一夜経つても何の策も浮かばないまま二日目の試合を迎えた。二日目の試合は準決勝が長崎北高校、決勝戦が純心高校だった。その準決勝の試合前、私がベンチに座ろうとしてオフィシャル席の後を通った時、オフィシャルの生徒達の会話の一部が私の耳にチラツと入った。オフィシャルの生徒達は私が後を通ったのに気付いていなかった。「今年の鶴鳴ボロボロってよ」

私は、そのことを聞いて内心ムツとしたが、私自身も鶴鳴の昨日の試合ぶりを思えば、オフィシャルの生徒が言っていることと同じような気持ちを持っていたので腹立たしさをどこに持って行きようもなかった。しかし、オフィシャルの生徒達の会話は、私に「今に見てる！ きつとなんとかしてみせるぞ」という気持ちを奮い立たせるのに充分の刺激を与えてくれた。

「昨日から今日にかけて、チームとしてどうするかという具体的な策は浮かんで来ない。それが正直な気持ちだ。ただ、個人に目を向けて見るとワン（一瀬）が上級生チームの中でやっている時と同じ気持ちのまま新チームでプレイしているのが気になる。インターハイチームでプレイする時はナウ（松山）やマツク（浜口）が点を取ってくるからおまえが一〇得点であっても不思議ではないが、このチームじゃおまえが三〇点や四〇点取ってもおかしくはないはずだ。新チームでやる時は『私がひとりやる』というような気持ちで勝手放題やってみよう。まだチームプレイのことを考えたってどうしようもない段階なんだから」

オフィシャルの生徒の会話に刺激を受けて私が選手に言ったことはただそれだけだった。しかし、結果的にはそれ以外に正しい答えはなかった。一瀬も私のことばでもやもやしていたものがぶつ切れたのか、準決勝の長崎北校戦では昨日とはまるで別人のように勝手放題のプレイをして四一点をたたき出した。一瀬がそうして思いきり自分勝手なプレイをやり始めると、チームプレイが乱れるどころか他の選手達まで伸び伸びプレイするようになった。難しい場面は一瀬にまかせておいて一瀬がしかけたプレイにサツと合わせ、自分達も点を稼ぐのである。

準決勝で新チームとしての戦い方がわかったので、まず私自身が落ち着いた。そうなると当然選手達も勢いづく。決勝戦では準決勝での戦い方に応用編が加わってかなりバスケットボールの試合らしい展開ができた。おまけに、あまりにもひとりやり過ぎる一瀬にボックス・ワンをやったり、一瀬と山口を分断するトライアングル・ツーを敷いたりする相手のディフェンスも臨機の処置で見事にクリアーして勝利をものにできた。決勝のスコアは四九対四二であった。

この優勝は実に大きかった。なぜなら、新チームのメンバー構成はこちらが一瀬ひとりの生き残りに対して純心はスタメンがほとんどそのまま生き残り、しかもその連中は中学時代に全国中学選抜大会でベストエイトの成績を収め、それがそのまま繰り上がって高校に進んだチームだったからだ。

それを知っている外野席は、「浜口や松山が卒業したら、今度は純心だろうねえ」とうわさをしていたし、ふたを開けてみると初日の鶴鳴のもたつきはそれを見事に実証するような試合ぶりだったから、新チームでの優勝の価値は一層大きなものになった。

このことは、来年の見通しが立ったという意味で価値が大きいというだけでなく、同時進行の全国選抜大会に向けてやっている練習が何の憂いもなくやれるという意味でも大きかった。

それにしても一年生のこの二日間の変わりようには驚いた。肝心なところは一瀬がひとりでふんばったが、そのような安心材料があると、それまで生まれたばかりのヒヨコみたいにひよるひよるしていた一年生がすっかり自分の役割を演じるようになるのである。そればかりではない。この二日間で確実にバスケットがうまくなった。このことは、その後の私の指導方法に大きな示唆を与えてくれた。

私は、自分自身を追い込むし、選手もギリギリまで追い込むタイプのコーチである。しかしこの試合は、選手を追い込むだけでなく、必ずひとつは安心できる材料を見つけてやったり安心させるような

ことばを使ったりしてやるのが大切だということを私に教えてくれたのである。

それから一ヶ月後、今度は県の新人戦が行なわれた。決勝戦はやはり純心高校とであった。両者ともこのひと月間にぐんと伸びていた。試合は長崎地区の新人戦とまったく同じような進行をたどり、またもや鶴鳴が勝った。スコアは五四対四七であった。

さらに二ヶ月後、県の新人戦でベストエイトに入ったチームは再び九州高校春季大会の県下二次予選で九州大会の出場権をかけて戦う。この二次予選も前回同様純心との決勝対決となり、これまた鶴鳴が勝った。スコアは六二対四四であった。「鶴鳴は今年までだよ」とうわさされてた新チームは、大方の予想を裏切って開幕三連勝である。しかし、この試合は大変な試合だった。滑り出し、鶴鳴は歯車が噛み合わずにシュートがポロポロ落ちる。試合開始から八分間ノーゴールである。一方純心は最初から波に乗り、ポンポンシュートが決まる。十三対〇となったところで辛抱していた私もたまりかねてタイムアウトを請求した。その時私が出した指示は、

「バスケットは四〇分間の勝負だ。ひとつひとつのプレイよりも、全体のリズムに気を配れ。細かいことには一喜一憂するな。まだまだ勝負い込むところではない」

そのタイムアウトの直後に一瀬がスリーポイントを決めてから鶴鳴の歯車が噛み合い出し、じりじりと純心を追い上げて行った。それでも滑り出しの借金が響いて前半終了時点で二五対三〇と五点のビハインドである。しかし、後半に入ると試合は前半とはまったく逆の様相を呈し、純心はまったく点が入らない。後半三分を過ぎたところで鶴鳴が純心を捕まえ、三一对三〇と逆にリードを奪ってからはもう電車道だった。

四〇分の試合を長距離走に例えれば、消費時間から考えると一万メートルのレースに相当する。この試合は、鶴鳴がタスキを受けた時は相手と八分の差があったということになる。八分といえど距離にして約二千メートルだ。一万メートルのレースで前を行く相手に二千メートルの差をつけられているとしたら、並みの選手ならうろたえてオーバーペースになったり、意気消沈してレースに意欲をなくしたりするところである。

そんな状況の中で鶴鳴の選手達は冷静にレースを運び、六キロ通過地点ではすでに相手と肩を並べていたということになる。私は自分のチームの選手ながらその冷静さには舌を巻いた。

遠征合宿

二月の九州大会では一回戦で熊本九州女学院と当たり六二対五六で負けたが、この四ヶ月間で鶴鳴は確実に強くなった。初めはどうなることかと心配だったが、この九州大会を終えて「今年もなんとかみなさんに見てもらえるチームになりそうだ。よかったよかった」そう思った。

三月一日。鶴鳴の復活を成し遂げた立て役者達が卒業した。そして、その立て役者達が卒業した後で私は新チームの選手達を集めて言った。

「昨年のチームは全国制覇の悲願を込めて歩んだからすべてのことに悲壮感が漂っていた。その悲壮感を真剣さとか情熱と同じものだとして解釈している人がたくさんいるが、それはスポーツ本来の姿ではないと私は思う。スポーツは本来楽しいものだ。やる者も見る者も楽しくなければならぬ。今年には弱くなつたからどうでもいいという意味ではなく、真剣に厳しい練習をする中で、我々も、我々を見に来てくれる人も共に楽しめるバスケットをやりたいと思う」

そう宣言した後の最初の強化遠征が三月下旬の関東遠征と徳島遠征だった。まず、毎年恒例になって

いる共石主催のひまわり杯だ。ひまわり杯に集まったチームの中では東亜学園が一番強い。東亜学園はエースの大山が全日本ジュニアチームで韓国に遠征してるからかなり戦力ダウンしてはいるが、セントラの斉藤が成長していてやはり全国優勝を狙うにふさわしいチームだった。他に北は北海道から南は九州まで、全部で十二チームほど集まったが、鶴鳴は東亜学園に次いで二位だった。

チームの構成メンバーからして二位になったのも大健闘だったが、この合宿で論議的になったのはそのことではなかった。それは、「山崎監督は学校でもこんな風にやさしいんだろつか」ということと「鶴鳴の選手はどうしてあんなに淡々とした態度で試合ができるんだろつか」というものだった。

確かに試合のベンチでは私は選手を叱らない。それは通常の練習でも同じである。試合形式の練習では、失敗したことを咎めるよりも失敗による心の動揺を長引かせないようにすることの方が大切だと思うからである。だから「いいよ。それでいい！」とか「しょうがない。次頑張れ！」というようなセリフが多くなるのである。

もちろん、すべての練習をそんなやり方で通しはしない。基本練習や分析練習では合格点をやれるまで追及の手を弛めない。悲壮感を漂わせてやるのはよくないと言っただけ、のべつ「いいよ」「や」「しょうがない」ではレクリエーション部になってしまうはずだ。遠征合宿では試合しかやらないから「いいよ」とか「しょうがない」が多くなるだけである。

鶴鳴のバスケット部がレクリエーション部でないのは、監督である私自身が選手の態度に感激させられる場面がしばしば起こることで証明できる。三年生になると特にそんな選手が多くなる。今年の模範生は一瀬である。一瀬に感激させられたことはたくさんあるが、その中のひとつを紹介しておこう。

それはひまわり杯から転戦した徳島招待合宿のできごとだった。いくら他の選手が伸びてきたとはいえやはり鶴鳴は一瀬の出来具合で左右されるチームである。だから、一瀬にかかる負担は他の選手に比べてはるかに大きい。約十日間の連戦による疲労のため、徳島合宿では日を追う毎に一瀬の動きが鈍くなっていた。しかし彼女はそれを見事にはね返して最後を締めくくったのである。

迎えた最終日の最終試合の聖カタリナ戦の一瀬は、プレイをするというよりコートを行ったり来たりするだけでさえ肩で息をする有様だった。それでもプレイの決めどころになると渾身の力を振り絞ってゴールに向かう。しかし、それがことごとくポロツポロツと落ちた。身体が浮かないからボールも重いのである。試合も聖カタリナにずっとリードされていて一度もそれをひっくり返せないまま残り二分になっってしまった。

点差は六点。残された攻撃回数はおそらく双方二回、多くても三回ずつだろうという場面である。鶴鳴のボール保持。一瀬は、通常どんなチームを相手にしても平均三〇点は取ってくる選手だが、この試合はここまでわずかに二得点。しかも、この攻撃が失敗に終われば負けはほぼ確実という場面であった。そんな状況の中で、一瀬が粘りに粘って放ったスリーポイントシュートがこの試合で初めてスパッと決まった。差は一挙に三点に詰った。

さらに互いに一回ずつの攻撃を失敗し、三点差のまま残り時間が一〇秒のところ聖カタリナがパスミスをし、鶴鳴のバックコートスローインとなった。フロントコートに持ち込んでも普通のフィールドゴールでは一点負けで終わる。スリーポイントシュートを打ち、それが成功しなければならぬという難しい局面である。

一瀬は先行し、ベースラインまで下りた後、味方を三人ぐらいスクリーンに使ってガードポジションまでフルスピードで上がってきてポイントガードの鴨川から受けたボールを思いきり打った。スリーポイントラインから一メートルぐらい後方だった。そして、それがノータッチでスパッと決まった。試合は引き分けだ。一瀬はこの試合八点しか取れなかったが、その価値は通常の三〇点をはるかに優るもの

だったし、この引き分けは、トロフィーも賞状も何も無いが、昨年の浜松インターハイの優勝に匹敵するほど価値ある引き分けだった。試合終了後、一瀬はボロボロになった身体を引きずり、歩くのがやっとだった。そんな一瀬の姿を見て、後に続く後輩の鴨川や神崎達が奮起しないわけがない。

超大型新人

四月になった。どのチームにも新人生が加わる。今年の注目新人は西有家中学校から純心高校に入った永田だった。一七七センチ。ジャンプするとリングをつかむという鳴り物入りだった。私も永田を中学一年生の頃からよく知っていたので何とか獲得したくて一生懸命リクルート活動をやったが永田は結局純心に決まった。

鶴鳴には、茨城と名古屋から自主的に鶴鳴でバスケットをやることを希望してきたふたりを始め、地元からふたりの選手を獲得した。しかし、その四人まとめても純心の永田にはかなわなかった。加えて周囲の選手達は中学時代に全国ベストエイトに入った選手達だ。外と中が揃った純心は強かった。

新人加入後の最初の公式試合は四月下旬に行なわれる春季選手権大会である。バスケット関係者の注目の的は永田だった。純心がどうだ鶴鳴がどうだというのではなく、試合を見に集まった人達はみんな永田を見に来た。永田はみんなの期待に見事に応えた。永田は初陣で三一得点を挙げ、試合は六五対五八で鶴鳴が負けた。永田の加入は、それまで鶴鳴が新チームになって三連勝していることや、鶴鳴が春休みの遠征でひとまわり大きくなったことなど簡単にご破算にってしまった。

試合後の報告書に私は次のように書いた。

「永田という純心の一年生は怪物ですよ。高校でただひとりナショナルチームに選ばれた浜口でさえ二年生の途中ぐらいいまで公式戦で強いチームを相手にした時は、五反則退場で得点六という程度の働きしかできない試合がたくさんありましたから。それと比べても永田はただものではありません。」

昨年の鶴鳴は長身者二枚を擁して、他のチームに『あー、身長が欲しい』と悔しい思いをさせたのでしようが、今年は逆になってしまいました。しかし、それならそれでこっちは六人いるんじゃないかと思わせるディフェンスをやればいいんだし、アウトサイドのシュート力をつければゴール下の争いは関係なくなるんですから。『鶴鳴の試合、おもしろいよ。見に行こう』というバスケットファンをひとりでも多く増やしたいと思います。がんばります。」

六月の高校総体の決勝戦の相手はやはり純心だった。永田の加入により純心も強くなったとはいえ、こちらには全国優勝のスタメンだった一瀬が生き残っている。春季戦では負けたがなんとか勝利をもぎ取ってインターハイに駒を進めるつもりで臨んだ。

しかし、決勝戦を前にして準決勝の長崎商業戦で一瀬の唯一の同僚である三年生の山口が剥離骨折を伴う足首捻挫を負った。決勝戦には使えない。困った。決勝戦ではコート上の三年生は一瀬ひとりだ。通常の試合よりさらに一瀬に負担がかかる。だが、頭を抱え込んで悩んでも仕方がないので一瀬以外はとつかえひつかえつないでいく作戦で試合に臨んだ。一瀬もそのことは充分わかっていてひとりで踏ん張った。一瀬の得点は前半だけで二二点。まさに獅子奮迅の活躍である。前半終了時点でのスコアは三八対三五で鶴鳴が三点のリードだ。

後半は作戦を変えた。一瀬が奮闘し過ぎたためにかなり疲労している。だから後半の滑り出しは一瀬を囿にして他の選手で得点を取りに行くことにした。後半開始の最初のゴールは作戦通り右のコーナー

から安部がスリーポイントシュートを決めて先行した。後半開始直後に六点のリードである。これは大きい。しかし、一瀬以外の選手が後半の二〇分間すべてをそのように調子よく乗り切れるわけがなかった。結局プレイを封じられて一瀬を捜してボールを預けるといふ場面が増えてくる。点差を詰められ、捕まえらるるのにさほどの時間を必要とはしなかった。

一瀬は春休みの合宿の聖カタリナ戦と同じく、ゴールまで持ち込んだではポロツと落とし、攻め切れずにもがいている間に三〇秒オーバータイムを取られるというケースが増え始めた。明らかに疲労である。だが、もつとつしよつもなかった。一瀬を交替させれば残りのメンバーでは絶対に持ちこたえられない。一瀬には聖カタリナ戦の再来を期待してそのまま踏みとどまってもらったが、結局一瀬の後半の得点は五点。合計で二七点。一方純心のルーキー永田は前半十六点後半十八点とコンスタントに得点した。ゲームスコアは七三対五八。完敗である。昨年はインターハイ優勝。その翌年は県予選敗退だ。まさに弱肉強食の世界である。

BASKETBALL TOURNAMENT OF THE AMERICAS

六月二六日に成田を発ち、アメリカ、オレゴン州ポートランドに行った。バルセロナオリンピックのアメリカ大陸予選を見るためだった。もちろん、お目当てはアメリカ代表チーム（ドリームチーム）である。私は、ドリームチームのひとりひとりの選手にも興味があったが、ドリームチームと他の国のチームの力の差がどれくらいあるのかも興味深かった。

ドリームチームの初戦はキューバだった。さてどんな試合になるのだろうと少し興奮ぎみで観覧席にいた私は試合直前の光景にあっけにとられてしまった。キューバのポイントガードがマイケル・ジョーダンに握手を求めた。ジョーダンは気軽にそれに応じる。するとキューバの他の選手達が我も我もと握手を求める。あげくの果てはカメラを持ち出してジョーダンと並んで記念撮影をしてみらう。これが、オリンピックの出場権がかかった大事な試合前の光景である。それほどNBAの人気はすごいということだ。

ところが、試合が始まるとこのお祭りみたいな雰囲気は一変した。キューバにとってはどうせ勝てっこない相手だし、試合よりもジョーダンやバードとの記念撮影の方が大事だったかも知れないがドリームチームがそうではなかった。

ドリームチームの選手達は誰ひとりとして大差で勝負が決まるキューバに対してからかい半分でプレイをしたり手を抜いたプレイをする者はいなかった。特に印象的だったのがジョーダンのディフェンスだった。相手のガードを一度たりとも楽にハーフラインを越えさせないぞというすごい気迫でプレッシャーをかけた。それは、NBAの試合でもプレイオフのファイナルで見せることのないような真剣さだった。だから、キューバのガードは再三ジョーダンにスティールされた。

私はキューバのガードは幸せ者だと思った。どんなにスティールされようがジョーダンに何点取られようが、テレビでしか見たことのないあのマイケル・ジョーダンが今自分の目の前にいて、しかも自分に対してこれほど真剣に全力を出して立ち向かってきてくれるのである。バスケットをやっている者にとってこれ以上の幸せが他にあらうか。

他の選手も皆そうだった。チャールズ・バークレーはルーズボールをものにして猛烈なスライディングでボールに跳びつき、勢いあまってゴール下で構えている報道陣のカメラの列に衝突して後頭部を負傷し、医務室で治療を受けるために一時退場した。

ドリームチームの選手のこんな態度が、アメリカ大陸予選を一層楽しいものにしてくれた。ドリーム

チームと対戦するチームはどこも例外なく握手攻めと記念撮影の行事を行なったが、試合内容はすべて初戦のキューバ戦と同じものだった。

日が経つと私たちも少し雰囲気に慣れてずうずうしくなってきた。観客席とフロアーの間にはガードマンがスラツと並んでいて、一般の客は絶対にコートに入ることができないようにしてある。それを私たちは、中村監督と本永氏が放送局の解説者として所持していたプレス用のIDカードを借りて首にぶらさげ、堂々とフロアーに降りて試合前のシューティングをしている選手を写真に撮ったり、それをバツクに自分の記念撮影をしたりした。

私は臆病なので、「そんなことしていいの？バレて場外追放なんて俺いやだよ」と尻込みしたが中村監督は「なーに、アメリカ人には日本人なんてみんな同じ顔に見えるからバレやしないよ」と私を励ましてくれた。結果は中村監督が言つとおりまんまとうまく言った。

ゴール下のエンドラインの外で練習を眺めているとドライブインをしたマイケル・ジョーダンが私の目の前二メートルぐらいまで近付いた。皮下脂肪のまったくない引き締まった身体がそこに立っているだけで私は身震いした。五〇才の私が自分のこともぐらい歳の開きがある選手の威厳に圧倒され感激しているのである。キューバのガードが握手してもらって喜ぶはずだ。

ゴール下でドリームチームの練習風景をバツクに記念撮影している時だった。ブレイザーズの看板選手であるドレクスラーが私にドンとぶつかり私の足を踏んだ。ドレクスラーは「オー アイアムソーリー」と私に謝った。私は足を踏まれてものすごく感激した。ドレクスラーは確かに私の目を見て私にとばをかけてくれたのである。観覧席に戻った後、私は「俺、ドレクスラーに足を踏まれた」と、中村監督や本永氏に自慢した。

すばらしいできごとやすばらしい人。それは例外なくそのことやその人に出会ったすべての人々をこどもにしてしまう。鶴鳴の選手の前では威張り散らしている私も、ドリームチームの選手達の前では完全にこどもになってしまっていた。

優勝杯返還

鶴鳴は県予選で負けたからインターハイには出場できない。だから、開会式で返還しなければならぬ優勝杯などは純心に預けなければならぬなあと思っていた。ところが夏休みに入る前、高体連事務局から電話がかかってきて「優勝杯返還には選手が五人必要ですからよろしく」と言われた。インターハイには出場しないのに開会式だけでは優勝杯返還のために参加しなければならないのである。

私はいやだった。試合にも出られないのに開会式にだけは参加しなければならぬなんて、高校総体で負けた悔しさに惨めさが加わってその両方をまる一日味わわなければならぬことになる。私は純心に代理でやつてもらうわけにはいかないかと高体連事務局に尋ねた。すると、それはとんでもないことだと叱られた。考えてみれば当たり前のことだ。惨めだからいやだというのはまったくこっこの都合であって、そんなわがままが通るはずがない。

私は、五人の選手だけではなくエントリー選手全員を連れて日向に向かった。どうせ日向に行かなければならないのならついでに鹿児島経由で遠征合宿をして帰ろうと思ったからだ。会場に到着し、係員に到着した旨を告げると私はさっさと会場を立ち去り、誰も来ないような喫茶店に入って時間をやり過ごした。それでも数人の関係者に見つかった。旧知の監督さんやスポーツ用品メーカーの人が私が居そつなところを捜しまわって私を見つけ出してしまったのである。

開会式が終わるとすぐ私達は鹿児島に向かった。神村学園の宿舎に泊めて貰って合宿をするためだっ

た。スクリメージや合同練習、グラウンドでのインターバルトレーニングなどメニューを変えながら四日間強化練習をした。選手も私も一生懸命練習に打ち込んだが「今日は二回戦か」「もうベストエイトが決まったなあ」と、インターハイのことが頭から離れなかった。そんな未練たらしい思いを振り払おうとすればするほどそれはしつこくつきまどってきた。

夏休み

夏休みが明けるとすぐ全国選抜大会の予選がある。この試合は是が非でも純心を破って暮れの全国選抜大会出場のキップを手に入れなければならない。

夏休みに入る前から選手には宣言していたが、夏休みは午前中がシューティングとグラウンドインターバル、午後が体育館での練習という内容で四〇日間をやり通した。グラウンドインターバルの内容は、

- ・五〇〇メートルタイムトライアル一本
- ・四〇〇メートルダッシュ五本
- ・一〇〇メートルダッシュ一〇本

である。

通常、夏休みには体力の向上を狙いとした練習はしない。夏休みのように午前午後の二部練習ができる時でなければ下級生にゆっくり技術指導をしてやれる暇がないからこの時期に個人技能やチームフエンスをしつかり習得させるのである。

しかし、今年は特別だった。九月六日の純心戦に向かって「やり遂げた!」とか「乗り切ったぞ!」というような気持ちの高まりをもって夏休みを終わらせたからである。合理的合理的と済まし込んでばかりいては本当の修羅場は乗り切れない場合がある。

鍛えるといってもやみくもに鍛えるだけでは身体を壊すから休養日を設けなければならない。その休養日が合計八日。したがって練習日は三二日間である。私は、練習をした内容が試合で使えるようになるまでには三〇回の練習が必要だと思っている。だから私の練習はひとつの単位が三〇回を目安とする。夏休みの練習は三二回。私の考えでは丁度一単位修了で選抜予選を迎える計算になる。しかし、四〇日の間には雨が降る日もあるし、中学の大会のスカウトや何やがあってグラウンドインターバルができただ数は二六日間だった。三〇回に四回足りないがほぼ一単位と見ていい回数である。

七月二〇日。グラウンドトレーニング初日の模様をビデオに収めた。そして八月三〇日、夏休み最後のグラウンドトレーニングの模様もビデオに収めた。テープをつないで見ると一目瞭然、一年生の工藤と寺平の身体つきから走るフォームがまるで違っていた。もちろん全員真っ黒である。

このように「あと一枚しか残っていない全国大会出場のカップは是が非でも取るつ」と意気込んで迎えた夏休みであったが四〇日の間に大きな事件がふたつあった。

ひとつは終業式の日にはS選手が辞めると言ってきたことである。S選手は三年生だ。大事な試合に使える選手ではないがこれまでに全国選抜大会や九州大会には何回もエントリ選手の中に入れて連れて行った選手だった。

そんな取り扱いをしてもらっていたにもかかわらず、夏休みの練習は今年は特別にハードになりそつだとわかっていながらそんなことを言うS選手に、私は言いようのない憤りを感じた。だが、「おまえに対する怒りをエネルギーにして俺はがんばるよ。わかった。やめる」そう捨て台詞を吐いただけで退部を認めた。心が冷めた人間にいくら怒りをぶつけても空しいだけだと思ったからである。

もつひとつは夏祭り事件である。

毎年夏休みの前半に長崎の港では三千発の花火が打ち上げられる盛大な港祭がある。今年の夏休みは辛い練習が続くし県外から来ている選手がいるので、私は練習が終わったあとで寮生を高台にあるホテルのレストランに連れて行って、食事をとりながら気晴らしにこの祭を見物させる計画を立てた。

ところが、ホテルのレストランに電話をしたらもう予約で満員。みんな考えることは同じなのだ。あとどこへ電話をかけても同じだった。そこで計画を変更し、長崎の名所になっている稲佐山展望台までクルマで選手を連れて行き、そこから見物させようとした。ここなら最高だ。しかし、いろいろ聞いてみると、まずクルマで頂上まで行くこと自体大渋滞で困難だろうということがわかった。また、もし行けたとしても帰りに渋滞に巻き込まれ、寮の門限までに帰れるのは無理だろうという結論に達した。

そこで私は、選手に事情を説明し、特大のアイスクリームを買ってやるからそれを食べながら寮の屋上から見物するように伝えた。選手達は非常に楽しみにしていたので残念そうだったが事情が事情だけに納得した。

しかしそれからまた事態が変わった。一年生の何人がどうしてもお祭を見たくなり寮母さんをお願いしてタクシーで祭見物に出かけたのである。この時寮母さんも上級生も心配した。渋滞に巻き込まれて門限までに帰りつけないかも知れないから出かけるのを見合せろと忠告した。

だが、一年生達は私が立てた計画を楽しみにしていただけにどうしても見たくて寮母さんと上級生を拝み倒した。寮母さんも、同じ建物の中にいる短大生と違って高校の部活動の選手達は毎日毎日辛い練習をしているのだからたまには息抜きをさせてやってもいいじゃないかという気持ちで許してしまった。

しかしみんなの心配どおり見物に出かけた選手達は渋滞に巻き込まれて門限に遅れた。帰る途中で電話を入れ、大急ぎで帰って来たので寮母さんもやかましくは言わなかったが上級生達は一言注意した。

「やっぱり行かなかった方がよかったですよ。今後気をつけなさいよ」

ところがこの忠告に対して一年生が逆恨みの反発をした。一年生の間で上級生をボイコットしようという相談が持ち上がったのである。ボイコットの具体的な行為は上級生とは口をきかないというものだった。上級生に呼ばれても返事をしないし、もちろん会話はしないというのである。私がそれを知ったのが祭の二日後だった。

私はこんな行為がもつとも嫌いだ。体育会系の部活動ではまだまだ上級生が下級生に無意味な説教をしたり、廊下で上級生に出会う度にバカでかい声で挨拶させたりしてそれが礼節だと勘違いしている風潮があるが、私はそのようなバカげたことは絶対にさせない。むしろ何も知らない下級生に対して上級生の方が気を使えと言っている。雑用は進んで上級生がやって見せろと言っている。バスケット部の上級生は伝統的にそれを実行している。それなのにこんな行為で反発をした下級生を私は許せなかった。

その日私はそれに関わった下級生を集めた。バスケット部だけではなく他の部の下級生もいた。私は首謀者を前へ出させた。そしてその事実の間違いがないか問いただした。首謀者はコックリした。

「きさまがやったことはどんなことがわかるかあ！」

そのことが終わるか終わらないうちに私の鉄拳が飛んだ。倒れたその選手を引き摺り起こしてまた殴った。三年前、松山と浜口のふがいなさに腹が立って殴った時はしばらく自己嫌悪に陥った。しかし今回は殴りつけてもまだ憤りが治まらなかった。「これで俺がクビになるならそれでいい！ きさまらみたいな奴がこの世に生きていること自体我慢ならん！」最後に私が吐いたセリフだった。

八月三〇日で強化練習を打ち切り、三一日から選抜予選までの六日間は練習をわずか四〇分で切り上げ、蓄積した疲労を回復させる期間とした。カーボローディングはマラソンのような休憩なしでひたすら体力を消耗し続けるようなスポーツには有効だが、バスケットボールのように選手交替ができたり作戦タイムがとれたりするような競技にはそれほど有効ではないと知ってはいたがこれも試みた。

九月六日の午後、予定通り純心との決勝になった。まだ残暑の厳しい中での試合だったが選手の動きは軽かった。夏休みの練習は確かに効いていた。前半から鶴鳴が少しずつリードを広げる試合展開となった。前半終了残り三分を切ったところでスコアは三一对十九。私はこの時点で勝利を意識した。

勝利を意識したが故に私は一瀬をベンチに下げた。これまでの試合では一瀬に頼り過ぎ、肝心なところで一瀬が疲れてシュートを落としてしまう場面が多かったからである。しかし、後半に備えて一瀬を下げる間に三ゴール連取されてしまった。三一对二五の六点差で前半を終了。少なくとも一〇点上の差をつけて前半を終われるはずだったのにもつたないことをしてしまった。

私が反省したのは一瀬を下げたことではなかった。その間の指示を明確に出さなかったことだった。試合は、一瀬をベンチに下げている間に差を広げなくてもよいから差を縮められないまま終わればよかったのである。極端に言えば三〇秒のオーバータイムを二回とられてもよいから徹底したディレードゲームに持ち込み、そのまま終わればよかった。私はその指示を明確に出さなかった。

その結果、選手達は一瀬を下げた後もそれまでのリズムに乗ってポンポンと気軽に攻めた。そして、ドライブのボールをステールされ、リバウンド奪取からの速効を立て続けに出され、あつという間に三連続ゴールされてしまったのである。

前半の主なデータは一瀬の得点が一〇点。骨折が治った山口が健闘して十三点。一方純心の永田はわずかに二点。後半は一瀬が十三点で合計二三得点。純心の永田は後半地力を発揮したもののそれでも一点しか取れず、合計で十三点である。しかも、純心のリードマンである川口は一瀬を守るために無理しすぎて五反則退場となってしまった。

前半終了直前に失敗はあったものの、決して試合のペースが純心に傾いたわけでもなく、双方のエースの得点を比べても一瀬の方が勝っている。そんな風だから後半一〇分過ぎまで前半の差をキープし、鶴鳴のペースで試合は進んできた。

ところが、川口のバックアップで出場してきた神徳が後半一〇分過ぎにスリーポイントシュートを決めたことがきっかけとなり試合の流れが怪しくなってきた。永田はなんとか抑えていたが、二番手の田中がジャンプシュートとリバウンドシュートを決めて粘り、調子に乗った神徳が二本続けてスリーポイントシュートを決めてたちまち追いつかれた。

それでも私は大丈夫だと思っていた。逃げ切れると思っていた。神徳が当たっているとはいえ所詮はバックアップだ。勝負がかかったぎりぎりの局面で頼りになるプレイをできるわけがない。私はそう思った。しかし、五七対五七で迎えた土壇場。双方一回ずつの攻防しか残っていない局面で、鶴鳴の攻撃は一瀬がドライブで持ち込んだレイアップシュートがリングを一周なめてポロツと落ち、そのリバウンドボールを得た純心の攻撃は田中が苦しい姿勢ながらジャンプシュートを決めた。この瞬間に鶴鳴の平成四年度は終わった。

昨年は十二月二六日。全国選抜優勝大会で中村学園に負けて平成三年度が終わったが今年はその県予選で負けて終わった。しかもこれで、平成四年度の全国大会出場はすべての夢だけで終わってしまった。三年前から騒がれ始め、年を追う毎に脚光を浴び、遂に頂点を極めた年の翌年は、またどこにもいる県大会止まりのチームになったのである。

全国優勝を目指していた時もその後も、取り組む姿勢に何等変わったところはない。それでも結果は

天と地の差だ。これが勝負の世界。鶴鳴はまた振り出しに戻った。